
とあるGANTZからの転送者

音夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるGANTZからの転送者

【Nコード】

N8516Z

【作者名】

音夢

【あらすじ】

注意、この作品は『GANTZに選ばれた男の娘』のバロディーとして書いています。

神田 かんだ あかね 茜はある事件をきっかけに死亡して、GANTZに選ばれた。

そんなGANTZで約1年間戦い続けてある星人により殺された。そして目覚めたら『とある』の世界に転送されて、茜の世界ががりと変わっていく。

プロローグ（前書き）

音夢の第2作品目となりました。
いっぱい見て下さい。

あと、文章が固過ぎるかもしれないので、ご一承下さい。

ブローグ

「っ!!」

そんな声を出しながら、僕は強靱な剣戟により、体を剃る様に吹き飛ばされる。

「ぐはっ」

吹き飛ばされた先に有った車にぶつかり、車のボンネットはへこみ、フロントガラスは僕に突き刺さる様に割れる。すると僕の体には痛みと言うなの衝動が駆け抜ける。

僕は車に乗る様になっている体を直ぐに起こすと、持っていたガンツソードを構える。

そして大きく息を吸い、荒れた呼吸を直しながら目を閉じる。

頭の中には憎しみや怒りと言った物が、僕を支配するかの様に込み上げる。それは妙に心地良く、僕のリミッターを外していく。

すると体は軽くなり、その支配に身を任せ、溺れながらを開き、こう呟いた。

「破壊する」

僕の心は『破壊』と言言葉に包まれていき、自分を壊していく。

するとそいつのオーラが僕を食らい、潰すかの様にに強大になる。

だが僕はオーラに飲み込まれながらも構えた刀をそいつ目掛けて、突く！

足はしっかりと踏み締められ、腕にはそいつを捉えた感覚と確かな手応えがあつた。

だが次の瞬間、僕の心臓はそいつにより突き抜かれた。

体には痛みと言う、概念を通り越して、『無』つまり麻痺が僕の体を覆う。

そして

「えっ」

僕の中には疑問だけが浮上する。

なんで？なんで！ちゃんとやったのに
すると段々と意識が消えていく。

体は倒れていき、胸からは血潮が吹き出され、目には僕を突き刺した刀を持っている爺いが立っている。

「青いのー」

爺いはそんな事を僕に言い放ち、その言葉が僕の頭に響き渡り、僕は完全に地面に倒れ込む。

そして体は動かなくなり、爺いが気持ち悪い笑みを浮かべながら消えていく。

爺いは完全に僕の前から消える。

すると僕の頭に走馬灯が走り抜ける。

嫌だ！

僕は死にたくない

まだ、たくさんやりたい事だつてあつたし

それにこんな死にかたは嫌だよ

僕は走馬灯に縋りながらも、ゆつくりと目が閉じていく。完全に目を閉じると僕の瞳から涙が零れた。

涙は僕の頬を通りながら、僕は完全に死亡した。

死亡した体は重く、そして痛みが走っている。目を開け様としても開かず、暗闇だけが僕の目に入り込んでいる。

暗闇の中で僕はただ一人で孤独を味わっていた。そんな僕にはもう考える気力すらなく、ただひたすらに暗闇の中にいた。

「もう死にたい」

そんな僕の本音が響き渡り、僕を押し潰して来る。涙は枯れ果て、悲しいすら無意味だった。

もう嫌だ！

僕は暗闇の中で何かを殴る様に腕を横に降る。腕には何かが当るはずもなく、僕は空振りをした様に暗闇の中に倒れ込む。

そんな体を起き上がらせる様に足に力を入れる。大切な人を守れもしないゆつくりと立ち上がり、僕は本音を暗闇に解き放ち。

なに一つ守れないなら、僕はこんな自分を恨む。喉には力が入り、声を振り絞り。

僕はこんな、こんな自分を、殺す！！
叫ぶ

声は暗闇に響き渡り、僕の体を溶かす様な光が僕に降り注ぐ。

すると枯れ果てたはずの涙が、目から零れ落ちた。

そして僕は光を求める様に手を伸ばす。

伸ばした手は燃える様な痛みが走りながら、光に飲み込まれる。様に転送され、消えていく。

体は全て消え去り、もう力すら入らなかった。
顔だけが残る

そして最後の力を振り絞って

「誰か助けてよ」

そう叫び、僕はなにかを握った。

その時には僕はもう光に飲み込まれて消えた。

僕は助けを求めて、消えていった体に力を入れる。
すると体には力が入り、僕はゆっくりと目を開く。

目には眩しい程の光が入り込み、僕は反射的に目を瞑る。

そして目が慣れた所でもう一度目を開く。

そして入って来た光景は教会だった。

しかも教会の中で一番偉い人が祈りを捧げる、魔方陣が書かれた所に僕はいた。

手には本を握り、茶色のショートヘアだった髪はロングヘアになっている。

そして着ていたはずの服は着ておらず、代わりに黒い修道服を着ていた。

僕は理解が出来ず「何処？」そんな言葉しか出なかった。

プロローグ（後書き）

感想をいっぱい下さい。

主人公設定

主人公設定

神田茜 かんだ あかね

身長142cm 体重40kg

性別、ギリギリ男。まあ男何ただけだね。

特技・好き

格闘技 『GANTZのミッション中に鍛えられた我流の』

料理 『一人暮らしによって毎日の様に食事を作っていた。その為か料理本をよく見ていて、小技だけならProLevel』

大切な人 『友達や自分を見てくれる人』

嫌い・苦手

友達を作る 『沢山いたがGANTZによって奪われいき、失う事を極端に恐れている』

人ごみ 『人が周りにいると集中出来なかったり、よく男女とわずにナンパをされるから』

容姿

GANTZで表すなら、玄野計が2で岸本恵が8。

『とある』なら御坂美琴が7で一方通行3でわった感じ。

美男子と言う寄りは、可愛い、美しいが似合う美少女。

目はキレる、もしくは敵を殺る時には鋭く、そして狩人の目の様に

冷血になるが、普通時は優しい感じの目。

髪は転送前はミディアムショートなのだが、転送さるた事によって長く美しい茶色のロングヘアーになった。

声は女でも通用する高さの声と言うよりは、女では低くて男でも分かるかな？と言った感じの声。

性格は自分の事よりも周りを重視する様な良い人なのだが、自分ではただの偽善者、大切なを助けられなかった償いと言った思いが心の中にある。

僕は理解出来なくなっていた

手には見知らぬ本を握り、しかもショートだった茶色の髪がロングになっている。

しかも刀で突き刺された心臓はな治り、血の付いた服は黒く、そして妙に重い修道服に変わっている始末だ。

そして口から出た言葉は「何処？」だった。

目に入って来る光景は木の椅子が並び、僕の後ろには大きなステンドグラスがある。

ステンドグラスから光は反射されていない。

それには綺麗と言った言葉はなく、そんなステンドグラスはただのガラスだ。

そして多分、教会だろうがやはり『何故』となってしまう。

僕は記憶を思い出していく。

GANTZのミッション中に死んだはずなのに。

僕はゆっくりとだが、記憶された光景、声、人物を思い出していった。

すると頭の中に自分自身を殺したと思った記憶、そして、そんな自分を助けて欲しいと思った二つの記憶が流れて来る。

「大切な人は守れずに、何で僕は生きてるだよ」

そんな言葉を自分自身に、そして大切だった、人達を思い浮かべながら僕は呟く。

すると体の中に怒りと憎しみ、愛おしさが溢れ出す。

怒りは僕の心を支配し、憎しみは体を支配する、そして愛おしさは僕の衝動を呼び起こしていく。

「ぐっう、はぁー、ハアハア」

僕は右手を額に当て、肩で息をしながら、何とか怒りと憎しみを抑える。

「ハアハア僕には死ぬ覚悟すらない、の、か」

僕は自分自身を憎み、死にたいと思ったが死ぬ覚悟すら存在しない。

「なら」

体を起き上がらせ、唇を噛み締めながら。

「弱い僕には生きるしかない。あの人達の為にも、弱さを捨てる」
僕はそう呟いた。

例えばどんな事が会っても、死なないと。
生きるだけしか出来ないなら。

僕は一旦、気を落ち着かせて状況を把握する為に、持っていた本をもう一度見る。

本の表紙には何も書いてなく、

1000ページと超えているだろうかと言うくらい厚い。

そしてそのページ数に見合った重さが手に掛かる。

「見てみるか」

僕はそのページ数に悠つを抱きながらも本を開く。

そこにはインクで書かれた様な文字があり。

『自分を憎み、自分を殺したいと思った黒い玉の使者よ、力を欲する』

こう書かれていた。

僕がその文字を見た瞬間に何かが変わる。

「っ」

痛みが僕の頭に走り抜け、体の血に何かが生まれた。

血管から血は身体中を巡り、僕は本を離す。

だが離れた本は空中を浮き、頭に直接的にページが入り込んでくる。

その莫大なページのデータは、頭に覚えていく事は出来ずに、ただ理解と言っただけがされた。

すると細胞が理解された答え、そして身体中を駆け巡る血に反応する様に何かがおこる。

それは僕の背中に焼ける様な痛みが駆け抜ける。

それと同時に、明らかに僕が存在が変わった。

それは強さとも言え、定義とも言えるだろうか。

「何これ、ハアハア」

僕は肩で息をしながら、理解された答えを頭に思い浮かべた。

その途端、頭に痛みが駆け抜ける。

痛みにより、頭は何も考えられなくなる。

すると本は青い炎を生みながら燃え上がり消えていく。

「なんだったの？」

僕は手を額に当てながら、そう呟いた。

すると目の前にある大きな扉がゆっくりと開く。
扉は木が伸縮し、そして扉を繋ぐ金具からは扉の体重をなんとか支える様な危なっかしい軋みが響く。

扉が完全に開き、扉を開けた二人の人が見えた。
僕は直ぐに修道服のローブを羽織り、顔を隠す。

一人は男で、赤髪のロン毛をしている。
身長は200を超えているだろうか
顔には縦線のバーコードがあり、そして僕と同じ黒い修道服を着ている。

もう一人は女で、片方だけが太ももまで無くなっているジーンズに、
白いTシャツ、そして腰まで滑らかに伸びたポニーテール。
そして腰には長い刀がある。

そいつらが僕に近づき歩いてくる。歩く度に音を立て、そして目が
会った瞬間に、場の空気が変わる。

空気は痛い程に僕に突き刺さる。

「君が『黒い玉』の使者かな？」
修道服の男が僕を挑発するかの様に言ってくる。
「知らないよ」

「嘘は辞めた方が良いでしょう」
ポニーテールの女が冷血に僕に言い放つ。
「嘘なんて言つてませんよ！」

「それは僕達が決める事だよ」

するて男はタバコに火を付け、吸い出す。

「なにしてるの？」

「これをするためさ」

男はタバコを僕に向かって落とす様に投げる。

「なっ！」

すると僕からしたら、あり得なくはない光景がおこる。

タバコに付いた火がまるで、その場に広がる様に燃え上がり、僕に近づいてくる。

これだけならば、全くと言っていい程に僕は見てきたが、それを人がやっていると言う事が不思議だった。

「っ」

すると僕はロープに当たり、ロープを燃やしながら消えていった。

「ロープ燃えちゃった」

僕の顔は完全にあいつらに見られた。

「君、女だったのか」

「違うよ」

そして僕は長い髪を靡かせる様に右足を後ろに引く。

「まあ、どうでもいいけどね」

男は手に炎を集めながら。

「巨人に苦痛の贈り物」

放たれた

男は手に炎を集めながら

「巨人に苦痛の贈り物―」
放たれた。

「やっぱり、あり得ないよね」

放たれた炎とは、約5mぐらいが離れているが熱く、大気中にある水分を枯れ果てるぐらいまで気温を上げる。

すると炎から火花が散らされる

火花は周りにある椅子や床に着火しそうなりながら、段々と大きくなり僕に近づいてくる。

僕は反射的に足に力を入れ、炎に接近する。炎に近づくと体には焼ける様な熱が突き刺さる。

暑い

そして炎との距離が1mを切った時、僕は炎に飛び込み様に回避し、男の視界から完全に消える。

「残念だったね。まあ、これながら何回やっても「おそいですよ」

「えっ！」

僕は修道服のズボンを膝ぐらいまで落とす、一瞬で男の真横に来ていた。

男は直ぐに僕から距離を取りながら、もう一度炎を手に集める。

すると背中に味わった灼熱の痛みが、また現れる。

そして僕はこんな言葉を無意識に呟く。

「力を解き放て」

そう呟いた瞬間に僕を覆う様に、螺旋を描きながら青い炎が現れた。

「ふふ認め様、君が黒い玉の使者だと言う事を。だが一旦君には痛い目にあってもらおう」

男がそう言つと、男の感じが変わる。

すると男から空気？なのかな？、解らないが渦を巻く様に何かがある。

そして男はそんな事に見向きもせず、呟き始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

男を囲む様に炎が生まれる。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

そして男を囲った炎が、男の周りを回り始める。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり」

炎は巨体に

「その名は炎、その役は剣」

炎は熱く、呻き

「顕王現世よ、我が身を喰らいて力と為せ」

その瞬間、炎は男の後ろで牛になる。

「魔女狩りの王、イノケンティウス」

そのイノケンティウスと呼ばれた炎は僕を食らうように襲って来る。

「ステイル、やり過ぎでは」

すると女が刀を掴みながら、止めに入ってくる。

「関係ないさ」

だが男は止めずに、僕にイノケンティウスを向けて来る。

「暑い」

僕は螺旋を描いている炎をコントロールしながら、炎の純度を上げ、炎を槍の様に鋭くする。

そしてイノケンティウスの肩目掛けて、炎を飛ばし、貫く

イノケンティウスの肩は消滅するが、直ぐに復活する。

「そんな事しても無駄だよ。炎と炎がぶつかり合うだけさ」

男は僕を蔑む様に言ってくる。

「へー、なら」

僕は感覚を研ぎ澄ませながら炎を操り、炎を消す。

「なんのつもりだい」

「関係ないでしょ」

すると男は軽くイラついたのか

「そうだね」と言い、そのままイノケンティウスを僕に襲い掛からせる。

「熱がダメなら」

僕は手をイノケンティウスに向ける。

すると手には鉄をも溶かす熱が伝わってくる。

「アブソリュートゼロの炎を」

僕は手に渦を巻く様に、炎を集る。そして炎を刀の様にして、手で握る。

すると手から身体中に、炎の温度が駆け抜ける。

それは冷たさと言っなの、炎の熱だろうか。

そして足に力を入れ、イノケンティウスに飛び込む様に接近する。

1m付近まで接近すると、僕は炎の刃をイノケンティウスの首目掛けて、斬りつける。

手には物体を斬った感覚はなく、空振りした感じだ。

「なに！」

男はあり得ないと言うよりは、あるはずが無かった光景を見たかのような声を出す。

それは多分、コレのせいだろう

イノケンティウスは首から、身体中を蝕む様に凍結していく。

結構、使えたな

僕はある程度 of 感覚を覚えながら、また炎の純度を上げていく
すると炎は大気中との温度差により、音を立てる。

「くっそ、なら」

男はもう一度、炎を集め様とすると、女が黒いポニーテールを揺らしながら僕に近づいて来る。

「流石にやめた方がいいですよ」

女は軽く怒っているのか、冷血過ぎる声で男に言い放つ。

「しょうがない」

男はそれを察したのか、炎を消しさる。

「すいません、私の仲間入りが迷惑を掛けました」

女が急に謝罪をしてきた。

「えっ？なに！」

僕は状況を理解出来なくなった。さっきまでは男を殺る、で理解出来ていたが、今の女の謝罪で理解不明になった。

「だから、悪かったと言ってるんだ」

男までもが僕に謝罪してきた。

「えっと」

すると僕はいつきに緊張感から解き放たれた。それと連鎖するかの様に、炎が僕の手から消えていく。

炎が全部消えると、足に身体中の体重が掛かり、意識が遠のきながら倒れていく。

そして僕は倒れながら女の胸に倒れ込んだ。

「キャッ」

女は可愛らしい悲鳴を上げる。

が、少なくとも僕を退かさないうって事は、嫌がってはいない様だ

「すみません」

「いいですよ。ゆっくりと寝て下さい」

女は僕を包み込む様な笑顔で、僕の頭を撫でてくれた。

そして僕は女の言葉に身を任せて、眠りに着く。

僕の目の前には僕と言うなの化け物がいる。

それは翼を生やし、腰に掛けて長い髪と、手に持っているブレード、そして着ている修道服には大量の血が着いている。

そんなやつと僕は、この白い空間にいた。周りには何も無く、ただ白く、壁の無い空気が続いていた。

すると、そいつが僕に喋り掛けてくる。

「てめえは何がしたいんだ」

「何って？」

僕はそいつの疑問を抱き聞き返す。

「ふっ、簡単さあ。てめえはGANTZに出会って大切な人が出来た。だが、大切な人を失った、てめえは最早それを忘れて、新たな力を手にして自分を欲しいと、自分が愛しいと言った。そんな、てめえは何なんだよ」

そいつの言葉は痛みを思わす程に、深く、鋭く僕に突き刺さり、僕の心を抉り、切り裂く。

「違う！僕は忘れてなんか」

僕は叫び、そいつを睨みながら叫んだ。

だがそいつは

「違うないさ」

その言葉で片付けた。

「五月蠅い！！僕は、僕は」

僕は叫びながら、強く拳を握り締める。手には爪が突き刺さり血が出る。だが痛みを感じる暇さえなく怒りが込み上げる。

「責められただけでキレるなよ」

また僕を、僕を

感情は収集がつかなくなり、怒りは限界地点を、超えた。そして思わず声が出た。

「何が分かるんだよ」

「はっ？」

そいつは意味不明なのか飽きた様に言った。

「何が分かるんだよ！！」

僕は感情、理性のままに叫び。喉には痛い程の力が掛かり、叫んだ。

「まさにヒステリックだな。そんなクズに代わって僕がてめえを殺してやるよ」

するとそいつは、持っているブレードを高く上げる。ブレードからは血が、そいつの手に向かって、ブレードの刃を津たりながら移動していく。そしてブレードを振り下ろした。ブレードからは血が飛び散り、白い床を血で染め上げた。

「じゃあな、クズ」

そいつはブレードを腕の一部の様に扱い、僕に接近してくる。僕は足首と太ももを伸ばす様に、力を入れ、大きな回避行動を取ろうとした時には、ブレードは僕の左胸を突き刺している。

「えっ」

左胸からは血潮が吹き出て、身体中を麻痺させていく。そして麻痺

すら感じさせない程の痛みが走る。

「な、ん、で」

そいつはブレードを僕の左胸から抜き、僕を見下す様に「また会うのかな。クズ君」と言い放った。

するとそいつは腰から、体全体を抉る様に僕の前から消えていく。僕はそいつが消えるのを見ながら、ゆっくりと後ろに倒れていく。

そして、そいつが完全に消え去り、僕は白い床に倒れていく。だが床に着く事はなく、遠泳に倒れ、落ち続ける。

手を頭の上に翳しながら、僕は痛みを感じ、多量の出血をしながら「ぐああああああああ」と叫んだ。喉には痛い程の力が掛かり、そして声は枯れ果てる。

すると僕を救う様に光が差し伸べられる。僕はその光に縋る様に、翳した手で掴もうとするが、光は掴めずに落ちていく。

その途端に、僕の目が覚めた。僕は左胸を抑える様にして、体をおこす。すると体の節々が軋み、痛みを発する。僕は慣れた様にその痛みを無視して、周りを見る。

そこは何処かの医務室だろうか。そして僕の膝には白いシートが羽尾られている。そしてシートの上には、黒く、そして僕を魅力する様に長く美しくポニーテールをしている女がいる。

えっと、さっきいた女の人だよね

僕は軽く悩みながら考え始める。

なんで、いっや、とりあえず起こさないと

そして手を女の体に乗せて、ゆっくりと揺すり始める。「あのー、起きて下さい。あのー」何回かやってみるが、全く起きずに寧ろ悪化したかな？。

女は僕に近づきながら、首に手を回す様に掛けて、ぶら下がる。すると首には体重が掛かるが、女性だからか、そんなに重く無く寧ろ軽いくらいだ。

「あのー、起きて下さい」

さつきよりも強く僕は女の体を揺らす。すると「んんう、んんー」と変な声を上げながら、ゆっくりと目を開らく。

「ふえっ」

女は僕を見て、可愛らしい声を上げる。そんな感じを見ると、守って欲しいけど、護りたい感じが出て来る。

「あの、そろそろ離してくれませんか？」

流石に女性がこんなに近くにいると、そのー、気恥ずかしい。

「あっ？あっ！、そのすみません」

女は漸く目を完全と言つか、僕にぶら下がってるのに驚いたのか、頬を赤くして、僕から飛び跳ねる様に離れる。すると女の髪は中を美しく舞う様に広がり、そして女の元へと戻っていく。

女は僕から離れると床に立ち、顔を下に向けながら、モジモジと両手を重ねて、指と指を回している。その光景は凄く可愛く、僕を癒してくる。

「あの、その「眠かったんですね」

「えっ」

僕は女がいい終わる前に、僕の言葉を言った。そして女の驚く様な声は、僕の心にゆっくりと染み渡って来る。

「だって、コレ貴方がやってくれたんでしょ」

僕は羽織っているシーツを取り、ベットの隅に置くと女に見せる様に、体を回す。

僕の体には着ていた修道服は無く、代わりに白と黒を足らったミニスカート。上には胸元を露出したブラウスをきている。そして腕には2、3本の包帯が巻かれている。しかも包帯は少なくとも2回は取り替えられた様な感じた。

「あつ、はい」

女は覚束無い感じに答えてくれた。やっぱりね

「こんな事やってたら、誰でも眠くなっちゃうよ」そう僕は微笑みながら言った。すると女は落ち着く様に胸を下ろす。

「もう起きたんだね」

その声が耳に入ってくる。その瞬間、僕は足を回す様に体を声がした方向に向け、そして軽く拳を握り、構える。

そして体を回すと声の主が視界に入る。声の主はあの赤髪の男だった。

「ずいぶんと物騒だね」

1-4 (前書き)

今日の投稿は終わりです。

「ずいぶんと物騒だね」

僕の視界には赤髪の男が入っている。顔には縦線のバーコードがあり、修道服を着ている。

「貴方が言えた口ですか」

ゆっくりと口を開け、過去を思い出し、冷静に返した。

「ふっ、それもそうだね」

男は僕の事実過ぎる、事実を認めた。まあ、それが正しいよね。

すると男はベットに座る。ベットには体重が掛かったのか、軋み様に音を立てる。

「じゃっ」

そう言くと、男は修道服のポケットからタバコの箱を出した。そして箱からタバコを一本出すと、火を付け、口に運ぶ。

「「なっ」」

僕と女は同時にビックリしたかの様な声を出す。そして僕達の体は固まった。それはあり得ない光景を見たと言いか、男の常識を疑うと言いか。

そうして20秒くらいが経ち、「ぷっはー」男は口を開け、タバコの煙を出す。煙は中に浮かびながら、溶け込む様に消えていく。

「ここ医務室ですよね」

僕は固まった体を動かして、疑問を持ちながら言った。すると男は

当たり前のように「そうだね」と言った。

「僕は貴方の常識力を疑います」

「ってダメです」

女は腰に有った刀を抜き、タバコの先端を切り落とした。タバコの先端は落下しながら、空気中の酸素を含み、燃え上がる。そしてタバコは空気中でチリとなった。

「なにするだ、神製」

男は女の事を『神製』と呼びながら、もう一度タバコの箱に手を掛ける。

すると僕は反射的に炎を出して、タバコの箱ごと燃やした。箱からは鼻を刺激する様な匂いを一瞬だけ発するが、その匂いは消える。そしてタバコの箱はその場から燃え消えた。

「君も何をするんだ！しかも箱ごとって」

「医務室で吸う方が悪いんですよ」

僕の言葉に男は何も言えなくなつて、無理くり話を転換させようとしてくる。

「そう言えば君の名前はなんだい」

「無理に変えたいのは分かりますけど、名を聞くなら自分から名乗るべきですよ」

すると女は腕を伸ばす様に、刀を男の首筋に向ける。刀からは周りの光を反射して光っている。そうすると女は「そうですよ」そう言い放った。言葉からは飽きた様に感じられる。

「神製、分かったから刀を引いてくれ」

すると女は刀を男の首筋から、伸ばした腕を肘から折るように引き、腰にしまう。

「では、どうぞ」

「ああ」

男は軽く頷きながら、喋り始める。「僕の名はステイル マグヌスだよ」

すると女も喋り始める。

「私の名前は神製 火織です。気軽に読んで下さい」と可愛いらしく自己紹介をしてくれた。

「僕は神田 茜です」

僕は簡単な自己紹介だが、この中には100%の笑顔を入れている。その途端に二人の頬が赤くなる。

「えーと、それで。君の事を聞きたいんだが、いいかな」

ステイルさんが僕に聞いてくるが、僕の頭の中には先ず聞いておかないと、いけない事が有った。それは「ステイルさん、何で僕に襲って来たのか答えて下さい」

すると二人が苦笑いを浮かべながら、重そうに口を開く。

「いやー、その、ね、あれは」

ステイルさんの目はゆっくりと動き、目が合わなくなる。

「ステイルがかってに神田さんを試すと言って、やったんです」神製さんが一瞬でステイルさんの逃げ道を潰した。するとステイルさんは「あははは」と気まずそうに笑う。

「まあ、それは置いといて」

置いていい物じゃないと思うよ、ステイルさん。

「僕の事は呼び捨てで構わないよ。茜」

「わかりました。ステイル。なら神製さんも僕なんかに、畏まらなくていいですよ」

「わかりました。宜しく願います。茜」

と神製さんが僕を魅力する様に、綺麗で、今にも壊れるそうなくらいに繊細な笑顔を浮かべながら頷く。

「ですが私が敬語でないのなら、茜も私の事をもっと楽にお呼び下さい」

うーん、何がいいかな？

軽く悩みながら、一つだけ疑問が浮かぶ。それは、まだ敬語だよな。

「じゃあ、火織お姉ちゃんはどうですか？」

僕はなんとなく、からかってみた。

すると神製さんの頬が真っ赤になりながら、動きがゆっくりになっていく。

「かかか、火織お姉ちゃんですか」

「嫌ですよね、やっぱり」

僕はある程度の予想が出来ていた為、予想通りの答えを返す。

すると神製さんは唾を飲んだのか、喉の上から少しだけ喉仏が見える。そして神製さんはゆっくりと口を開け、「うれしいです。やっと、やっと姉になれます」と予想より右斜め上をいかれた。

「ほんとにいいの？」

「はい」

そうして僕は火織お姉ちゃんの胸に飛び込んだ。理由はもう一度、守るべき人が出来て嬉しかったからだ。すると火織お姉ちゃんが力いっぱい抱き締めてくれた。

その途端、僕の頭に何かが過る。それは僕に何かを訴える様に。

「で、僕達への質問はもうないかい？」

「えっ？あ！はい」

ステイルの声に僕は驚きながら、そう返事をする。ステイルが医務室の外に出て、台車を押してくる。台車は少しだけ音を建て、僕の目の前に止まる。

黒く巨大な玉を乗せた台車が

「この黒い玉の事、知ってるかい？知ってるなら茜、君との関係を教えてくれ」

1-4 (後書き)

感想を下さい。

115 (前書き)

感想をお願いします。

「この黒い玉の事、知ってるかい？知ってるなら茜、君との関係を教えてくれ」ステイルの声は僕に入らずに、通り抜けていく。

僕の目の前にあったのはGANTZだ。それは似た何かと言う考えも出るだろうが、違わない。これは紛れもないGANTZだ。その場を威圧し、そして僕の体を震わす。

「知ってるようだね」

「知らない」

ダメだ。この二人にはGANTZの事は教えられない。知ったら、GANTZに溺れてしまう。

「茜、私に教えてください」

火織お姉ちゃんはあからさまに嘘を言ってる僕を、怒るわけではなく、ただ優しく聞いてくる。

「ほんとに知らないよ」

GANTZの威圧に潰されそうになりながらも、笑顔を作りながら、その異様な物体に触れる。

「っ」

僕の頭に痛みが走る。それは、まるでGANTZと僕が繋がった様に痛みが放たれた。僕は額と頭を抑えて痛みを耐えた。

それと同時にGANTZのトランクが一斉に開いた。トランクの中

には、何も無かった。
そんな、あり得ない

GANTZを動かす為に必要な男や、ミッション中に使う武器すらも無かった。それはつまり、GANTZではない？のか。でもこの感じはGANTZだよな。

僕の頭には多数の理論が浮かび上がるが、結論には達していない。

するとゆつくりと浮かび上がる様に、GANTZに言葉が表示される。

『こいつらをやっちゃてください。ちなみにルールはないだす』

そんな言葉が表示されるとトランクが閉まり、また新しい言葉が表示され様とするが、文字は消えていく。

「なんなんだい？コレは」

ステイルが痺れを切らしたのか聞いて来るが僕は無視した。いや、声が僕の耳に入らなかった。

「GANTZ、答えてくれ。ルールがないって、どう言う事なんだ」

するとGANTZに正しい文字を隠す様に、無数の文字が表示されていく。そしてある一定の場所に正しい文字が表示される。

「100てんを取ったからだす」

「はっ？」

僕の口からはそんな、間抜けな声が出た。記憶を思い出してみるが、全く記憶にはない。

その途端、GANTZは転送されていく。転送された切り口は青く、そしてゲームなんかでよく見る、データの塊の様だ。

僕は手をGANTZから離す。するとGANTZは完成に転送された。GANTZが載っていた台車にはへこみすらない。これは台車が凄いのか、それともGANTZの仕業なのか今になっては分からない。

すると頭の痛みは消え、体にはリバウンドの様に緊張感なら解き放たれ、ゆつくりとベットに座り込む。ベットは軽く軋みながらも直ぐに終わる。

「茜、知ってるいる事を話して来れ」

「うん、わかった」

僕はゆつくりと口を開け、喋り始める。

「1年くらい前だったかな」

そうして僕は一拍空けて、また喋り出す。今度は真剣に

「1年前、僕は学校の帰りに友達と話しながら歩いていたんだ。そこでちよつとした事があつて、その友達が車に跳ねられそうになったんだよね。それで僕、友達を助ける為に走つて、友達を突き飛ばして、友達を車の前から退けたんだよね。そしたら案の定、車に跳ねられて、目が覚めたらあの『黒い玉』が目の前にあつた。したら、急に星人と戦えって言われて、僕、死に物狂いで星人達を殺したんだ」

すると僕の目から涙が零れる。だが僕は涙に気づかないで喋り続けた。

「そのうち、星人を殺すのが楽しくなつてきて、何だが自分が自分じゃ無くなつて、そしたら、そこで出来た大切な人が目の前で死んでいって、僕もう死にたかった、えっ？」

その瞬間、僕は誰かに抱き締められた。強く、優しく、そして包み込むように。

「茜は、茜は悪くありません。茜はもう、こんなにも泣いて、その人達への償いは済んだはずです」

火織お姉ちゃんの言葉は、僕の凍結した心にゆっくりと染み渡たり、そして凍結した心を溶かしていく。

「でも、僕は明里さんを助けられなくて」
僕は思い出すのさえ辛かった。

「なら、今度は私が守ります。私の命は貴方に委ねます。そして茜の命を私に委ねて下さい」

火織お姉ちゃんは更に強く、優しく僕を抱き締めてくれた。

「はい」

僕の心の氷は完成に溶け、心から返事が出来た。

「嬉しいです」

火織お姉ちゃんの顔は僕を魅力し、そして虜にする様な笑顔になる。

「もういいかな？」

ステイルのそんな言葉で僕達は慌てて離れた。そして離れた火織お姉ちゃんの頬を見てみると、頬は赤くなっている。

多分、僕も赤いんだろうな

「じゃあ、聞きたい事は終わったけど、ここからが本題だ」
ステイルの目は更に怖くなり、顔が真剣になる。

「僕達はある人を助けたいんだ。それを手伝ってくれ」

ステイルは頭を下げながら、まるで大切な物を守るかのような声で言うてくる。

「私からもお願いします」

火織お姉ちゃんも続いて、頭を下げる。

「分からないけど、僕に出来る事があるなら、僕はやりますよ」

「ありがとう」

火織お姉ちゃんが僕に抱きついてきた。体には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わる。

「あれ？火織お姉ちゃん、喋り方変わった？」

「茜にはもつと私を見てもらいたいから、そんなにきつい敬語は無しにしたいです、から」

火織お姉ちゃんは僕に断れたくないのか、声を震わせながら言うてくる。

僕の答えは

「嬉しい」

僕がそう言った瞬間に、更に強く抱き締めてくる。

「そうだ、ステイル」

「なんだい？茜」

ステイルは僕の声に不思議そうに返してきた。

僕がステイルに聞きたい事は

「あの炎ってなんなの？」

1-6 (前書き)

感想待っています。

「あの炎ってなんなの？」

僕がそう言った瞬間に二人が呆れ顔なのか、それとただビクリしたのか、ステイルは少し口を開け、僕に抱きついている火織お姉ちゃんは固まっている。

「どうしたの？二人共」

すると二人が思い出したかの様に喋り出す。

「いや、その」

火織お姉ちゃんはまるで気を使ってるみたいに、口をこもらせながら、そう言う。

「あれは魔術だよ」

ステイルのあり得ない言葉に、僕は呆然と固まった。

あり得ないよね。だって魔術って、あつ、でもGANTZもあつたし
そうして僕は無理くりにも、自分に理解させた。例えば分からない
事があっても。

「理解しようとしてるけど、理解しきれないようだね」

ステイルが心配なのか、上から目線で言ってきた。

「理解出来た方が凄いでしょ」

僕はステイルの言葉に理論的ではなく、客観的に返した。

「だって魔術って、例えば存在しても僕からしたらあり得ないし」

するとステイルが軽く悩みながら、ある事が閃いた様で喋り出す。

「見た方が早いだろうし、あそこに行こうか」

「あそこですか」

ステイルと火織お姉ちゃんのそんな言葉に僕の頭には？が浮かぶ。すると火織お姉ちゃんが僕から離れて、床に立ち上がり、僕に手を差し出してきた。

「行きましようか」

その言葉が耳に入ってきた瞬間に、僕はゆつくりと手を伸ばし、火織お姉ちゃんの手を握る。その途端、僕の心はトクンと揺れる。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わってくる。それは優しく心を温めてくれた。それは嬉しく、僕の中に広がっていく。

「うん」

と僕はその嬉しさのまま立ち上がり、廊下へと出た。

廊下は10mぐらいのストロークが続いている。そしてそんなストロークの中には20個ほどの窓が付いている。

「こつちだよ」

ステイルの声に従い、僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら歩く。すると廊下には僕達の足音が響き渡っていく。

20個も付いている窓からは多分、季節は夏とギリギリ言える、7月下旬ごろの陽光が照り刺している。だが、そんな暑そうな陽光とは裏腹に廊下には冷たい空気が漂っている。

「そう言えば火織お姉ちゃん」

すると頭にある事が浮かぶ。

「なんですか？」

それは

「何で僕、女装してるの？」

「イヤでしたか？」

火織お姉ちゃんが僕の事を心配してるのか、少し声を小さくしながら言う。

「イヤじゃないけど、その、恥ずかしいから」

僕はそんな火織お姉ちゃんを見てると、心苦しくなっていく。

「茜は可愛いから大丈夫です」

火織お姉ちゃんは胸を張りながら、嬉しそうに言う。が、恥ずかしいのに変わりはない。でも火織お姉ちゃんが嬉しそうになるのを、見るのは僕も嬉しかった。

「分かったよ。火織お姉ちゃん」

と僕は笑顔になりながら、そんな言葉を言って、この話を終わらせた。

そうして歩いていくと、ある部屋の前で止まった。部屋の扉は木を使い、取っ手と留め具には鉄が使われている。

「ここだよ」

するとステイルは扉をゆっくりと開けると、留め具は軋みながら音を立てる。そうしてステイルが部屋に入っていく。

「入りますよ」

火織お姉ちゃんが僕を先導する様に先に入り、僕の手を引いてくれた。それは僕を安心させる様に優しかった。

「うん」

そうして僕は部屋に入った。

壁にはレンガが使われている。そして絶対にレンガが余って、作つたのだらう普通のより小さな暖炉がある。そして木で作られた机が1つと椅子が4人分あった。

「じゃあ、茜」

ステイルが椅子に座りながら話し掛けてくる。

「炎を出してくれ」

「分かった」

すると僕は火織お姉ちゃんから手を放して、体の力を抜いていった。炎を出した時の感覚を。反射的ではなく、心から

その途端に僕の中にあつた力がうめいていく。それはゆっくりと僕を蝕み、炎を生み出した。

炎を腕に渦巻く様に纏わせる。

「ステイル、これでいい」

「あ、ああ、君は素晴らしいよ。たった2、3回でここまで魔力を操るとは」

ステイルは本当に驚いたような様子だが、僕からしたら普通だった。GANTZの最初だってそうだ、生きてくうえで掴んだ感覚は体に覚えていかないといけなかった。

だがステイルの発言に僕は一つだけ引かなかった。

「ステイル、魔力を操るって、まだ魔術は使えてないの」

「それについては「私が教えましょう」

ステイルが話してる途中で火織お姉ちゃんが喋り出す。

「私は基本的には使いません。そのため、この刀とワイヤーで戦闘をします」

火織お姉ちゃんは腰にある刀を抜き、僕に見せる様に前に出してくれた。

「魔術を行うにはルーンが必要とされますが、茜はルーンを使わずに炎を出していくので、多分、魔力だけで出している力技だと思いますが」

火織お姉ちゃんがそう言い終わるとステイルが紙を出してきた。紙には20cmぐらいの魔方陣が書かれている。

「これがルーンを組み合わせた魔方陣なんだけど、魔方陣に魔力を通してくれ」

そう言うときステイルは魔方陣が書かれた紙を机の上に乗せた。

「炎の出し方は分かるけど、魔力の操り方は分からないよ」

僕は事実を述べると、火織お姉ちゃんとステイルが苦笑いをする。

「先ずはやってみて下さい」

火織お姉ちゃんの超えに後押しされながら、僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる

「なにこれ」

僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる。

「なにこれ」

その途端、肩甲骨辺りに激痛が走る。すると肩甲骨から蝕む様に腕にも痛みが流れていく。

「っ」

「茜放すんだ！」

ステイルが多分そう叫んだ、だろうが僕の耳には入ってこなかった。すると僕は倒れる様に机に手を着く。机が少し揺れ、安定感を失っていく。

「茜！」

火織お姉ちゃんの声がゆっくりと僕に伝わってくる。それは優しく、そして強く、僕の痛みを消していく。

「火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、ゆっくりと魔方陣から手を放す。その途端、魔方陣に無数の新たな線が浮かび、もう一つの魔方陣を作り出した。

「茜！」

そう火織お姉ちゃんの叫び声が聞こえたと共に僕は、火織お姉ちゃんが僕の手を引いてくれた。すると僕は火織お姉ちゃんの暖かさを感じながら、火織お姉ちゃんに向かって抱きつく様に倒れ、魔方陣から離れた。その途端、後ろからけたたましい音が耳に入っていく。

「こ、れは」

ステイルが一瞬、驚き言葉を失う様に、言葉を詰まらせた。

僕はすぐに魔方陣の方に首を動かした。そこには魔方陣から湧き上がる様に水が吹き出ている。そしてその水を新たに出来た魔方陣が凍結させていく。

「こんな事がおこるとは」

「これって、こう言う魔方陣じゃないの？」

僕は火織お姉ちゃんのあり得なさそうな声に疑問を抱いた。だって魔方陣は魔力を流して、その魔術を出す物だよね。

「いや、この魔方陣は使用者を浮かせる物だ。茜が作り出した魔方陣は別として、もともとあった魔方陣から水が出るこう言うなんてあり得ないんだ」

ステイルの言葉に僕は理解出来なかった。

「では茜は魔方陣を再構築したと、そんな事あり得ないですよ」

「分からない。だが、魔方陣を調べれば分かるだろうが、まず茜ステイルは手で額を抑えながら、疲れた感じかの表情で僕に話し掛けてくる。

「炎を出してくれ」

そう本題を告げた。

「分かった」

そう言う僕は感覚を手の平に集中させていく。すると手に何かが集まっていく感じがする。その瞬間、手の細胞とリンクする。

その途端、手の平に炎が生まれた。炎は手の平で熱く、渦を巻く様にぶつかり合い、ボールになっていく。

「これでいいの？」

そう疑問系で僕が聞くとステイルは「ああ」と淡白に答えた。するとステイルが僕に向かって、疲れた様に喋り出す。

「そのまま雷を出せるか？いや、そんなあり得ない事を聞いて、わ、悪いな」

ステイルが口を詰まらせた理由は多分これだろう。僕はステイルが話してる途中で、『雷』を出せるか、と言われた集中に炎に雷を思い描いた。その瞬間、炎が雷へと変わった。雷は空中にあるゴミに反発し、手の平で音を立てていく。

「なにが悪いの？」

「いや、茜ならあり得るか」

ステイルはそう呟きながら、自分で処理したようだ。

「もう茜も疲れただろう。明日、インデックスを追って学園都市に行く」

その途端、僕は理解出来なくなった。

「インデックス？学園都市？ってなに」

すると二人は思い出したかの様に僕に説明し始める。

「インデックスって言うのは僕達が助ける人さ。そして学園都市って言うのは君と僕達が明日いく場所だよ」

ステイルの言葉に僕は困惑した。

「えっ、明日！？それって最初あった時に言ってた事に関わりあるね？」

僕は日本語になってない日本語で話した。多分、頭が回らなかったんだと思う。

「ああ、あながちあってるが、聞いていなかったが茜はいいのか」

「なにが？」

するとステイルが口をこもらせながら僕に「学園都市に行く事だよ」と告げた。

「火織お姉ちゃんがくるなら」

「私も行きますよ」

と火織お姉ちゃんが僕を虜にする様な笑顔で、答えてくれた。

「なら行く」

僕がそう笑顔で言うのと二人の頬が赤くなった。

「じゃあ、茜の了解もえた所で、茜は神製の部屋でも休んでいてくれ」

「うん」

そう言うて僕は立ち上がり、火織お姉ちゃんに手を差し出した。

「はい、捕まって」

だが火織お姉ちゃんは反応しない。と言うか耳に入っていないのかな？

「火織お姉ちゃん」

僕がそう言うのと火織お姉ちゃんが反応してくれた。

「あつ、ごめんなさい」

そう言うて僕の手を握って立ち上がる。火織お姉ちゃんの頬は赤く、そして僕の顔を見てくれない。

「火織お姉ちゃん、僕の事キライになったの？」

そう言うのと僕の心に寂しさと、悲しさが生まれていく。

「そんな事ないですよ」

とちゃんと僕の顔を見て、笑顔で言ってくれた。

僕は最後に自分の思いを全て込めて「ほんと？」と言った。

「はい、茜は大切な弟ですよ」

と火織お姉ちゃんが笑顔で言いながら、その瞬間に抱きつかれた。

「うん」

僕は火織お姉ちゃんに逆らう事なく、受け入れていた。それは多分、嬉しかったんだと思う。

「では部屋にいきましょうか」

「分かったよ。火織お姉ちゃん」

と僕達は軽く話して廊下に出た。

117 (後書き)

原作に入らないよお。シクシク

118 (前書き)

原作に入らない。
あと感想を下さい。

僕達は軽く話して廊下に出た。

廊下には10mのストロークに、その10mの中に20個ほどの窓がある。そして窓からは先程とは違い、夏とは言えないような冷たい陽光が照らしだされ、僕の肌に突き刺さる。

気温は8 前後と言った所か

僕がそう思った瞬間、肌にピリピリとした何かが走り、僕の真をゆつくりと蝕む様に冷やしていく。

「茜は寒くないんですか？」

火織お姉ちゃんが心配そうな声で僕に喋り掛けてきた。火織お姉ちゃんのそんな声を聞くと、不安にさせたくないと言う気持ちが溢れてかた。

「大丈夫だよ、火織お姉ちゃん」

と僕は笑顔で言いつた。

「よかったです」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩いていく。

廊下には僕達が歩く度に床が少し軋み、音を立てていく。音は廊下の恥まで響き渡るが、その音に反応する者は一切いない。

と言うか、廊下の10mはあるストロークには人が全くいない。

「火織お姉ちゃん」

「何ですか？茜」

火織お姉ちゃんは心配と言うか、不思議そうな顔を浮かべて僕に返

してくれた。

そうして僕は息を吸い「何で人がいないの？」と聞いてみた。

「多分、今日はみんな色々やる事があるんだと思いますよ」

火織お姉ちゃんは冷静に答えてくれた。

「そうなんだ」

「はい」

と和む様なテンポと喋り方で話してた。すると僕のお腹から地響きの様な音になる。その瞬間、普通なら顔だけだろうが、それを通り越して、さっきまで寒かった体が一瞬で熱くなっていく。

「こ、こ、こりえは」

僕は完全にパニックって呂律が回っていない。すると火織お姉ちゃんがクスと、可愛らしく微笑むと僕に抱きついてきた。火織お姉ちゃんの腕が軽く僕に食い込み、そして暖かさが伝わってくる。

「そう言えば、もうお昼でしたね」

火織お姉ちゃんがそう落ち着いた感じで言うと、僕はある事が気にかかった。

それは「火織お姉ちゃん、今更だけど僕って何時間ぐらい寝てたの？」

とほんとに今更の事だった。

「えーと、茜が此方に来たのが12時ごろ、つまり深夜0時で起きたのが11時ぐらいなので、だいたい10：30分くらいですよ」
火織お姉ちゃんによる簡単な説明で僕はある事が分かった。それは僕が死んだ時間と連動している、と言う事だ。

「ありがと火織お姉ちゃん」

僕はそう笑顔で言うと、火織お姉ちゃんが僕から離れていく。すると僕の心が何故か寂しく、悲しくなっていく。それは泣く様な悲しさではなく、ただ火織お姉ちゃんを、求めていただけなのかもしれない。

「はい、では時間も時間ですし食事でもしますか」

火織お姉ちゃんが僕に気を使ってそう言ってくるた。僕はそれに甘えて「うん」と言った。

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に行くのではなく、食事をする場所、多分、食堂と呼ぶであろう場所に向かって歩き出した。

「茜は何か好きな食とかはあるんですか？」

火織お姉ちゃんが興味津々にそう聞いてきた。

その瞬間、僕はすぐに

「火織お姉ちゃんが作ってくれたら何でもいいよ」と返した。

「ふえっ」

火織お姉ちゃんは顔を真っ赤にしながら、そんな可愛らしく声を上げる。その声は僕の心をくすぐっていく。なんか萌えー、なのかな？

「可愛いよ、火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、火織お姉ちゃんの手を握った。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、僕の中に嬉しさを生んでいく。

「あ、あ、あ茜、そのえっ」と

火織お姉ちゃんの呂律は回っていない。と言うかタジってるのかな。

「どうしたの？火織お姉ちゃん」

「あ、あの、その」

火織お姉ちゃんは僕の声に必死で反応しようとしながら、両手の指を回しながら、モジモジと言う。そんな仕草はすごく可愛いくて、僕をくすぐっていく。

「イヤだった」

僕がその言葉を言った瞬間に、火織お姉ちゃんは「違います！」と叫んだ。声は廊下を響き渡り、反響をしていく。

「火織お姉ちゃん？」

「あつ、ごめんなさい」

と僕に気を使う様に火織お姉ちゃんは誤った。その途端、僕は火織お姉ちゃんを抱きしめた。何方かと言えば抱きついたが正しい表現だろうか。

「ごめんね。火織お姉ちゃん」

「えっ」

突然の謝罪に火織お姉ちゃんは、驚いた様な顔をしている。

「何で急に」

火織お姉ちゃんの問いに答える、為にゆっくりと息を吸い

「火織お姉ちゃんが好きだからだよ」

と言った。その途端、僕の心臓はトクンと大きく揺れ動いた。そうして僕はゆっくりと火織お姉ちゃんから離れた。

すると心臓はまた大きく揺れていく。だが、そんな事を僕は無視した。

そうして笑顔を作りながら

「火織お姉ちゃん」

「ひえ」

火織お姉ちゃんはそんな驚いた様な声をあげる。声は軽く裏返し、少し感高くなっている。

僕は声に気づかない振りをしながら、火織お姉ちゃんの手を掴み「行く」

と言った。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、ゆつくりと手に力を入れていく。そうして僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら、食堂に向かって歩き出した。

119（前書き）

あと2011年も少しですね。

はあー、今年も早かった。と言うか中学校に入学した事以外なにもなかった。あー、あと練習のかいあってか、両声類になって女声が出る様になりました。

そして今はガキ使の『笑ってはいけない』見てます。

では本編をどうぞ

食堂に向かつて歩き出した。

歩き出すこと5分。僕は火織お姉ちゃんの手を繋ぎながら、先導する様に歩いていたが、食堂の場所を知らない僕が先導なんて出来なかった。その為、途中から火織お姉ちゃんに先導をしてもらった。

そうして僕達は食堂の扉まで来た。やっぱりと言っていていいだろうが、扉は木材で作られている。そして扉からは、ほんのりといい匂いが流れている。

「入りましょうか」

火織お姉ちゃんが美しく、可愛いらしい笑顔で僕に言ってきた。

「うん」

と僕はそう言いながら、僕達は食堂に入った。

すると目には時代の良し悪しを感じる様な光景が入ってくる。食堂は先程の木材感とは売って違って、コンクリートかな？そんな感じの物を使って作られていた。それは建物が完全に変わっている感じだった。

その光景に僕は啞然とした。やっぱりあれかな。現代の社会構成かな。

「火織お姉ちゃん凄いな」

「何がですか？」

火織お姉ちゃんの顔には、僕が何を言っているのか分からない様な、不思議そうな顔をしている。

やっぱり、慣れちゃうと気にならないのかな？

「いや、その急に現代的になって」

火織お姉ちゃんはさっきの不思議そうな顔から、急に思い出したかのような表情を浮かべながら喋り出す。

「それですね。この食堂は昨年出来たばかりなので」

「納得したいけど、ビミョーに出来ない様な感じだね」

「そうですね」

火織お姉ちゃんとそんな簡単な話しをしたら、食を頼む為のおばちゃんがいるカウンターに向かって歩く。

歩いていると分かるのが、食堂は体育館並に大きい。そして、その大きな食堂の3分の2・5ぐらいが、ロングテーブルと椅子で埋めつくされている。

そうしてカウンターに着いた。

カウンターにはおばちゃんが一人と、2個のメニューがある。すると火織お姉ちゃんがメニューを見ないで、食を頼み始める。

「私は蕎麦を、彼には」

「同じで」

火織お姉ちゃんを待たせない為に僕はそう答えた。もっと簡単な理由で言うと、メニューの文字を見て分かるのが英語だ。つまり中も全て英語だろう。絶対に読めるはずがない。

するとおばちゃんは分かった様で、蕎麦を受け取りにカウンターのの中に入っていく。

その途端、僕はある事に気づいた。それは

「あつ、そうだ火織お姉ちゃん」

「何ですか？」

「お金つてどうするの？」

そうお金だ。僕はここに来るまでにGANTZを行っていた。つまりお金を持っているはずなんかない。

「ふふ、大丈夫ですよ」

そう火織お姉ちゃんは軽く笑うと、微笑みながらそう優しく言った。

火織お姉ちゃんの優しさは僕に伝わってくるが、

「いや、普通ダメじゃん」

するとおばちゃんが蕎麦を乗せた2つのプレートを持って来た。

「はい蕎麦だよ」

おばちゃんがそう言うと、火織お姉ちゃんはプレートを握る。

「ありがとうございます」

「あいよ」

とおばちゃんは普通に流しているが、あり得ない。だって食事だよ。お金いるはずだよな。

「どうも」

僕は一人取り残されたくない為、流れに合わせてプレートを握る。すると手には蕎麦の熱が生ぬるく伝わってくる。

「行きましようか」

火織お姉ちゃんはそう言いと、ロングテーブルに向かって歩いてい

く。それに着いていく様に足を動かす。

「火織お姉ちゃん、コレってどういうこと？」

僕の中にはそんな言葉しか、浮かび上がらなかった。

「この食堂は無料なんですよ」

と火織お姉ちゃんは当たり前前の様に言う。が普通ならあり得ない。

まあ、慣れていこう。そう僕は深く心に刻んだ。

そうして僕達は返却カウンターに近い席に座った。そこからはゆつくりと首を回し、周りを見てみると全く人がいない。

すると火織お姉ちゃんが箸箱に指を入れる。すると5、6回、陶器と陶器がぶつかり合う、甲高い音がする。そうして火織お姉ちゃんが箸を取って、僕に渡してくれた。

「ありがとう」

僕は箸を受け取る。すると火織お姉ちゃんの指と、僕の指がぶつかり合う。

「「あつ」」

僕と火織お姉ちゃんはそんな声を口から出した。その途端、火織お姉ちゃんの頬が赤くなっていく。

そんな火織お姉ちゃんの顔を見ると、僕の顔が熱くなっていく。多分、僕も赤いんだろうな。

そうして少しだけ沈黙が僕達の間を支配した。

僕はこの状況を打破すべく、口をゆつくりと開く。そうして

「食べよっか」

と勇気を振り絞って言った。普通ならこんな事に勇気なんていらないんだろうな。

「はい」

火織お姉ちゃんは恥ずかしそうな声で、そう返事をしてくれた。それは凄く可愛いだろうが、僕は火織お姉ちゃんの顔をあまり見れなかった。

そうして、ゆつくりと一拍置き

「いただきます」

火織お姉ちゃんとハモリながらそう言った。

僕は箸で蕎麦を掴み、口に入れた。すると口の中には蕎麦の美味しさと、出汁と中に入っていた鳥肉、ネギの美味しさが広がっていく。

「美味しい」

僕の口からは無意識に、そんな言葉が出た。

この味で無料なんだ。

「美味しい様で何よりです」

火織お姉ちゃんもそんな事を言いながら、蕎麦を口に運び、食べた。

「火織お姉ちゃんって蕎麦好きなの？」

「そうですね。一樣蕎麦や和食関係は何でも好きですよ」

火織お姉ちゃんはその返してくれた。

そうして僕は軽く話しながら食事を終わらした。

「「ごちそうさまでした」」

火織お姉ちゃんと合掌をしながら、そう言った。

僕は立ち上がる。するとある事に気づいた。それは最初よりも、数人だけ人が座っている。

そうしてプレートを握り、足を返却カウンターに向けて動かした。

返却カウンターは省スペースで作ってたのか、約1mぐらいの幅にプレートごと食器を入れる様になっている。

プレートを返却カウンターに僕達を入れる。

「では、私の部屋に行きましょうか」

「うん」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向けて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516z/>

とあるGANTZからの転送者

2011年12月31日21時51分発行